

2024年度 日本文化人類学会 次世代育成セミナー
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 文化／社会人類学セミナー
発表要旨

ヒト—ミツバチ—環境のケア関係：多種間の誘惑／誘引に着目して

続木梨愛（京都大学）

本論は、日本におけるニホンミツバチの養蜂を事例として、ヒト、生物、モノを含む多種の関わりの様相を明らかにするとともに、養蜂におけるケアが多種間の誘引＝誘惑によって引き起こされる過程を考察することである。ニホンミツバチの養蜂は趣味や副業としての側面が大きく、そこではヒトによるミツバチのドメスティケーションすらも前提としないヒト—ミツバチ関係が現れている。本稿では、佐塚 [Satsuka 2019] のマツタケ論文における複数種の大きな集まり（multispecies multitude）を援用しながら、ヒトと動物（種）の一对の関係を前提とせず、殺したり苦しめたりする言い訳ではないケアについて検証する。ここにおいてケアという用語は、存在者が互いに身体的な関わりを持って交渉・調整を行うことを意味する。本事例は2021年11月から2023年10月にかけて行った計14名の養蜂家へのインタビュー調査と参与観察に基づいている。2章では、インフォーマントの様々な事例を紹介しながら、ニホンミツバチの養蜂が養蜂家とミツバチの間の誘引＝誘惑の関係の上に成り立っていることを見ていく。3章では、ニホンミツバチを趣味で飼っている1人の養蜂家に注目しながら、ニホンミツバチに内在する管理の部分性から生まれる養蜂家からミツバチとのケアのやり取りについて明らかにする。4章ではニホンミツバチから蜂蜜を採集する事例を通して、搾取としての採蜜作業ではなく、ミツバチのより良い生を求めるための採蜜作業という見方を提示する。そして5章では、ニホンミツバチの外敵に対する養蜂家たちの実践から、多種の存在を含めたケアの形式について考察する。

グローバルな料理によるローカルの支配？

—ペルーの現代料理レストランのグローバリゼーション論

藤田周（東京外国語大学）

本論文は、ペルーの現代料理レストランであるセントラルが食材や食文化、調理法、料理、レストランをどのように関係づけるのか論じることを通して、ローカルとグローバルとの関係を扱う人類学的研究を批判的に検討する。現代料理とは西洋の高級料理をもとにしつつその枠を越えて発展してきた前衛的な料理のスタイルであり、レストランが位置す

る場所の自然と文化を解釈する料理を作ろうとしてきた。しかし、セントラルの料理がグローバルなガストロノミーに由来する調理法を使っていることに気づくと、それをローカルだとみなすことが難しく思われるかもしれない。あるいは、セントラルがペルーの先住民の知識や財産を収奪する新植民地主義だと考えられるかもしれない。本論文は、まず、グローバリゼーションにかんする研究が提起していたローカルとグローバルの関係を「基本の図式」として整理した上で、セントラルに対する人類学者や社会学者による批判から、先のような理解をもたらす発想を「ポストコロニアル理論」の図式として示す。その後セントラルによる料理の理解をたどり、ローカルとグローバルの基本の図式を背景に「セントラルの図式」を描く。セントラルは、グローバルによるローカルの支配というポストコロニアル理論の懸念を共有するが、そうした支配を唯一にして必然の帰結とみなすことはない。セントラルによれば、グローバルな調理法によってローカルな食材や食文化の可能性を適切に引き出す料理を作ることができた場合には、セントラルがペルーの食材や食文化の評価を高め、ひいては食材の生産者を支えたり食文化の発展に貢献できたりすると考えている。セントラルにおいてローカルとグローバルの関係は、料理に用いられる事物の起源ではなく、料理が開示する味によって判断される。

政治化するケア：東京・池袋の医療相談会の事例から

森麻里永（京都大学、日本学術振興会）

本稿では、新自由主義化が進む世界において、医療的なケアはどのように、官僚的なものとも新自由主義的なものとのあいだ／ただなかに隘路を見出すことができるかという問題を、東京・池袋の生活困窮者にむけた医療支援の現場の事例を通して検討してきた。世界的に保健医療福祉のケアの体制が国家的主体から民間の主体に移行する状況において、医療人類学の政治経済研究は、病いの社会経済的な回路を明らかにしてきた。病いのケアに関する議論では、困難な状況におけるケアがもたらす危うさや可能性に光を当ててきた。医療人道主義の多くの研究は、そのケアを「反政治」「危うい者の統治」などと批判し、包括的な政治的承認を求めた。それに対し、新自由主義的な政治においては政治的承認だけでは市場価値のないとされる生は次第に殺されていくために、そこにおける規範的な秩序の内部での権利や承認なしに作動する異なる世界の想像が必要だとの議論があった。その上で、医療が、Rancièreの言う既存の社会秩序や言説に挑戦しうるような領域としての政治的な時空間となりうることが示唆された。東京・池袋の公園での医療相談会の事例では、制度的な医療の場とは大きく異なる実践がなされていた。これを特徴づける場の緩やかさや、雑多性への寛容と医療者による期待を、本論は新自由主義的価値観へのローカルな対抗的テクノロジーとなっている可能性を指摘した。同時に、新自由主義的再編との「共振」も指摘した。これらを踏まえると、医療相談会の実践は、新自由主義と表裏

をなしているといえる一方で、細切れになりながらも、異なる想像力のための場づくりが試みられていると言える。

コロナ後遺症とケアの医療人類学：
「孤独の感覚」はどこからやってくるのか。
当事者インタビュー—感染から回復までの経験—
鈴木ミユキ（東京科学大学）

主題「コロナ後遺症とケアの医療人類学」における研究のうち、本稿は国内での当事者インタビューを中心にまとめた。研究の全体では当事者インタビューのほか、参与観察（医療現場、SNS上に存在する自助グループ、コロナ後遺症にかかわる分野横断的な専門医グループのフィールド）がある。

当事者インタビューにおいて興味深いことの1つに、回復することの過程では、医師ら医療専門職の理解と当事者の自己理解にしばしば差異がみられるということがある。そのズレがどこからやってくるのかを考えるさい、本稿では罹患から回復までの経験にともなう「孤独の感覚」に着目した。疫学分野でも新たに注目される「loneliness(孤独)」を分析の中心に据えることで、コロナ後遺症を「患うこと」の重層性が浮かび上がってくる。孤独の感覚と向き合う当事者の様相に触れることで、その基層にあるいくつもの問題が絡み合いながらコロナ後遺症が形づくられていることがみえてくる。「すべてコロナのせい」に回収できない患うことの経験は、これまでの illness 研究の文化理解にも重なりつつそれだけで説明できるわけではない。また、臨床の医療実践でみられる caring のセオリーや、医療化あるいは社会化することの枠組みだけで、すべてを捉えられるものでもない。本稿では、当事者と筆者との会話を通じ、顕在化されていくコロナ後遺症をめぐる個別具体的な問題を扱う。個人に現れる身体症状は、「コロナ後遺症である」という可能性を契機に、政治的要因や文化的要因など、よりスケールの大きな問題と絡み合い、深刻化あるいは軽症化を辿っていく。本稿では「コロナ後遺症」に向き合おうとする彼・彼女らの日常の回復のあり方を詳らかにすることで、患うこととケアの、新たな糸口を捉えるよう努めた。本稿はコロナ後遺症という現象の一端を明らかにすることで、医療人類学における「格差とケア」の理解を深める一助になることを目的とする。